



Title	ひきのばされた青年期について：現代学生とモラトリアム
Author(s)	村澤, 和多里
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 83, 159-186
Issue Date	2001-06
DOI	10.14943/b.edu.83.159
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/28825
Type	bulletin (article)
File Information	83_P159-186.pdf



[Instructions for use](#)

ひきのばされた青年期について

—現代学生とモラトリアム—

村澤和多里

On Prolonged Adolescence The Psycho—Social Moratorium of Students at Present

Watari MURASAWA

目次

はじめに	159
第1章 モラトリアム問題	160
1. ひきのばされた青年期	160
2. 3つのモラトリアム論	161
3. 3つのモラトリアム論の比較	164
4. 1980年代以後の青年論	165
5. モラトリアム問題の構図	167
第2章 インタビュー	168
1. インタビューの目的	168
2. 在学期間の延長について	168
3. 方法	169
4. 結果	169
5. 考察	176
6. インタビューのまとめ	180
第3章 結論	181
1. モラトリアム論における「問題の構図」	181
2. インタビューから導き出された「問題の構図」	182
3. 2つの「問題の構図」からの仮説	182
おわりに	183

はじめに

近年、非精神病性の「ひきこもり」の青年についてマスコミが取り上げる機会が多くなっている。これは、直接的には1995年代後半から「ひきこもり」の青年による犯罪が多発したことが要因となっているが、事実として「ひきこもり」の青年の数が徐々に増加しているという指摘もある(中村1995, 斎藤1998)。

マスコミなどで取り上げられるように「ひきこもり」の青年が犯罪親和的なパーソナリティを持っているとは考えにくい。マスコミの報道によって「ひきこもり」の青年たちが着実に社会的に追い詰められていっていることは確かなようである。筆者が関わりを持っていたある青年は、

社会と関わりをもっていないことに対する世間の白眼視を避けて引きこもるが、そのことによってますます社会との接点が希薄になってしまうという悪循環に苦しんでいた。「ひきこもり」という現象は、個人のパーソナリティにだけ還元できる現象ではなく、当事者と彼を取り巻く環境、あるいは言説を含んだシステムであると考えられる。

「ひきこもり」の問題は、ある人々にとっては社会とかかわりを持つことは近年ますます困難になってきていることを意味していると考えられる。青年と社会の関わりあいというテーマは、従来より青年期の課題として研究されてきたものである。青年心理学では、青年期を社会との関係で自己を位置づけていく時期ととらえ、Erikson, E.H. (1959) の理論を背景に「アイデンティティの確立」がその発達課題として考えられてきた。この意味では「ひきこもり」の青年たちは、アイデンティティの確立に失敗した「アイデンティティ拡散」状態にあるといえるであろう。しかしながらこのような分類はもはや何も語ったことにはならない。我が国において、1970年代後半以降「アイデンティティ拡散」は青年の常態的心理となっているからである(小此木1978, 笠原1978, 栗原1980)。

以上のような問題意識を持ち、本研究では、青年たちがどのような社会的リアリティを生きて、どのように社会との接点を見出そうとしているのかについて考察する。

このような視点はErikson, E.H. (1959) の意味での「アイデンティティ」概念に含みこまれると考えられるが、一般に流布している「アイデンティティ」という概念に含まれる社会順応的なニュアンスとの混同を避けるため、ここでは「アイデンティティ」とともに「自己確立」といった幅をもたせた表現ももちいる。

もちろん、心理学においては青年期のアイデンティティ形成や自己確立についてはこれまでも多数論じられてきたが、ここでは研究の対象を青年の心理的側面に限定せず、心理的なものと社会的なものを包括的に捉えることを試みる。具体的には、本論文では、なんらかの理由で卒業を繰り返し延べた大学生を対象にインタビューを行った。青年が大学を卒業することと在学期間を延長することとの選択を迫られた状況で、自分のリアリティをどのような問題として語ろうとしているのかに着目し、そこで成り立っている「問題の構図」を描き出すことを目的とする。ここで筆者は「問題の構図」という言葉をもちいたが、とりあえず以下のように定義しておく。筆者は青年のさまざまな語りや表現は、青年の読み取った自己と社会との図式によって規定されていると考え、また同時に、青年の語りや表現は自己の読み取った問題に対する解答の試みでもあるという考えている。そして、そこに成立しているさまざまな関係を「問題の構図」と呼ぶことにする。

本論の進め方として、まず過去の青年論において「青年期の延長」あるいはいわゆる「モラトリアム」についてどのように論じられていたのかを検討する。そこで論じられた「問題の構図」を明らかにし、次に、在学期間を延期した大学生のインタビューから現代の大学生における「問題の構図」を検討する。

第1章 モラトリアム問題

1. ひきのばされた青年期

青年心理学は20世紀初頭に創始されたとされるが、大きく発展したのは1950年代のアメリカにおいて青年独自の文化が出現したことによる。ジェームス・ディーンやエルビス・プレスリーに

象徴されるように、既存の社会的枠組みには回収されない独自の「青年文化」を理解するための議論が活発となった。当初より青年心理学は、青年たちの既存の社会への反抗的側面と、未来の「大人」つまりは社会的責任主体としての予備段階という順応的側面の矛盾するベクトルを射程にしていたが、Erikson, E.H. の「アイデンティティ」「モラトリアム」といった概念は矛盾するベクトルを解決する一つの方向性を示唆するものであったため、その後の青年心理学の規定をなすモデルになった。

日本では、青年期に特別な光があたり始めるのは、学生運動動乱が収束し始めた1970年代前半からであるといわれている。この時期までに日本社会は高度経済成長を達成し、高校進学率と大学進学率が飛躍的に増大した。このような社会構造的な変化によって、「子ども」と「大人」とのあいだのマージナル（境界的）な年齢層が増大し、独自の文化を形成していったことが、青年期への注目の背景にあるというのが定説である。独自の領域としての青年心理学の創設は、既存の枠組みでは理解できない青年たちの行動を理解する枠組みが必要になったことを意味していると考えられる。

日本において、高等教育が普及し青年層が大衆化したのは1970年前後であるが、このころすでに「青年期の延長」が問題として提出されている。1970年代後半から、この種の問題について論じた著作が続々と現れる。この時期は、青年の「しらけ」「無気力」「保守化」などが指摘された時期であり、Erikson, E.H. (1959) のいう意味での心理社会的モラトリアム（以下、単にモラトリアムと記す）として青年期が必ずしも機能していないことが問題にされた。そもそも猶予期間を意味する「モラトリアム」という言葉自体は「期限」を前提とした表現だが、アイデンティティを確立すべき期限がきてもアイデンティティが確立できないということ、あるいは期限が引き延ばされることについて論じられた。ここではこの問題についての代表的な論者として小此木啓吾の、笠原嘉、栗原彬の三者を取り上げる。

2. 3つのモラトリアム論

小此木啓吾 『モラトリアム人間の時代』(1978)を中心に

小此木(1978)は、Erikson, E.H. のモラトリアム概念に依拠しつつ、1970年代に出現してきた青年期心性をいい表わすために「モラトリアム人間」という言葉を用いた。「モラトリアム人間」とは、従来の「古典的モラトリアム心理」に對置される「新しいモラトリアム心理」を特徴とする人間で、モラトリアム期に許された特権に浸りつづけようとする青年の有様を意味している。

小此木は「旧来の社会秩序の中では、このモラトリアムは、一定の年齢に達すると終結するのが当然のきまりであった。個々人の発達図式についていえば、青年から大人になるということは、もはや一時的な遊びや暫定的な実験ではない特定の社会的自己＝アイデンティティを形成することを意味していた」と述べ、「古典的モラトリアム心理」の特徴として、①半人前意識と自立への渴望、②真剣かつ深刻な自己探求、③局在者意識と歴史・時間的展望、④禁欲主義とフラストレーションの4つをあげている。しかし、小此木によると、このような「古典的モラトリアム心理」は社会における青年の位置づけの変化にともなって急速に変容し、「モラトリアム心理そのものの“質”を決定的に変えてしまった」とされる。「古典的モラトリアム心理」から「新しいモラトリアム心理」への質的な変化として①半人前意識から全能感へ、②禁欲から開放へ、③修行感覚から遊び感覚へ、④同一化（継承者）から隔たり（局在者）へ、⑤自己直視から自我分裂

へ、⑥自立への渴望から無意欲・しらけへ、以上の6つをあげている。これらはすべて、社会的主体としての当事者意識が希薄化し、自己中心のあるいは自己愛的に変化してきていることを指摘しているといえる。このようなモラトリウム心理の質的な変容の背景として小此木は、第一に「産業社会化が進むにつれて、モラトリウムは、ただ単に『古いもの』の継承を目的とするだけでなく、むしろ刻々に進歩し、開発される『新しいもの』の習得、ひいては「新しいもの」の発見や創造をも目的とするように」なり、モラトリウムが「社会変動に対応するその社会全体の柔軟な適応性を支える弾力的な安全装置のような役割を果たすことになった」こと、第二に「豊かな社会の中での若者が、商品の消費者＝購買者として大きな比重を占め」はじめたことを挙げ、「かくして、『古いもの』へのとらわれがなくなり、『新しいもの』を探求し、流行に敏感で、何事も先取りする青年が、情報化、消費社会の主役となったのである」と述べている。しかし、このように「新しいモラトリウム心理」について時代的必然性を認めつつも、もう一方で小此木はこの心理構造について、戦後日本で達成された豊かさや平和がもたらした、「危機なき時代の心理構造」であるとも述べており、何らかの危機が発生した場合、その「無関心」から危機に対して組織的に対応できない危険性や、その「自己中心性」からまとまりのない反応が発生しパニックになる危険性があることを指摘している。

その後も小此木(1980, 1981)は、現代的な人間類型として「シゾイド人間」「自己愛人間」について論じているが、片桐(2000)も指摘しているように、基本的な枠組みは「モラトリウム人間」の延長線上にある。これらの人間類型はすべて、価値規範の解体した時代に、自己愛を満足させることに価値規範を置かざるをえなくなった人間として描かれている。さらに小此木(2000)は、「ひきこもり」についてもこれらの人間類型の特性が顕著に表れたものであると論じている。

栗原彬 「やさしさのゆくえ」(1981)を中心に

栗原(1981)の青年期論は小此木のそれとは対照的である。栗原は当時「無気力」「しらけ」と批判された青年の心性に、一縷の希望を見出そうとしている。それは、高度に管理化された社会に対するアンチテーゼであり、心の中の「大事なもの」をかかえながら管理社会を生きぬくために必要なスタイルである。

栗原は「モラトリウム」を産業社会の制度と主体としての青年の葛藤のダイナミズムを含む心理＝歴史的なものとしてとらえ、モラトリウムの延長の基盤を次のように説明した。長くなるが引用しておく。「産業社会の技術的要請と相対的な経済的余裕とがモラトリウム延長の基盤をつくる。だがそれだけではない。産業社会が生み出した管理社会が青年の〈予期的社会化〉を進める。つまり政治が青年期のあり方をきめようとする。それに対して、青年が疎外からの自己回復をはかり、歴史変革にかかわる主体性を追及するほどに、管理社会の本姓は自己実現を阻むから、青年のモラトリウムは先へ先へと述べ送りにせざるをえない。モラトリウムは、外的に延長することができる客体的側面と、内的に延長せざるをえない主体的側面をあわせもつのである」。

栗原はモラトリウム期間としての青年期を、産業・管理社会によって制度化された「予期的社会化」の期間であると共に、そこからの「自己解放のための予備的装置」であるとしてとらえた。しかしながら、高度経済成長をとげた1970年代後半においては、①小家族化に伴う過保護と父親不在、②地域共同対の解体、③受験体制と潜在的競争体制の制度化とそれに伴う同輩間の隔離、④青年にとって将来が「見通せた人生」となり時間展望をもてなくなったこと、⑤情報環境の自律化と

肥大化が<経験>を希薄にしたこと、などのような生活環境の変化によって「予期的社会化」の側面が肥大化していることを指摘する。このような生活環境の中では、理想的には、組織に過剰同調する形でモラトリアムを見限るか、青年文化のモラトリアムに永住するヒッピー型青年になるかのどちらかによって、同一性になるものを求めようとすると言われる。しかしながら、実際には多くの青年が同調型でもヒッピー型でもなく、大人の社会の役割と青年文化のモラトリアムの間に折り合いをつけようとし続け、自己の同一性を未決の状態（同一性拡散）に留保したまま、できるだけモラトリアムを引き伸ばそうとするという。また、社会に入った後にも、社会的役割意識の面では大人の世界を向いているが、価値意識の面では青年文化のモラトリアムを内面化しているという「二重意識」をもっているという。この「内面化されたモラトリアム」は、小此木の「新しいモラトリアム心理」と現象としては重なっているが、栗原は管理社会によって主体性がおしつぶされていくなかで「守るべき城」として機能しているという。「内面化されたモラトリアムは、青年期後期のモラトリアムが同一性の最終確認という本来の機能を果たさない場合に、社会的役割を引き受けながら大人世代との価値意識の切断を保とうとする営みである」。

具体的には、栗原は産業社会に対抗する青年たちの価値意識、つまり内面化したモラトリアム意識として、「やさしさ」を取り上げる。栗原によると、この「やさしさ」は学生運動の同志たちの間でつちかわれ、そののちも産業社会の厳しさに退行する価値として生き残ったものだと述べる。ただし、栗原（1989）では、「若者はしよせん産業社会の内部でしか生きていくことができない。社会が自分に課す役割を引き受けなければいけない。だが自分の大事な価値は若者文化のやさしさ価値の方にある。これがやさしい若者の内面の基本構造である」と述べ、「やさしさ」の意味を再度確認すると共に、「創建期の闘うやさしさは、管理社会の圧力化を大事なものを抱えて逃走し続けるやさしさに変り、他者に向けられた行為としてのやさしさから心情としてのやさしさに移行し、また「私たち」の間にやさしさからしだいに「私」一個のやさしさへと追いつめられていった」と、栗原が1970年代に夢想した「闘うやさしさ」がそのままでは対抗価値とはなり得なかったことを認めている。

笠原嘉 『青年期』（1977）を中心に

笠原（1977）は青年期の延長について、精神医学からの視点で発現しているが、小此木とはかなり異なる視点を持っている。小此木が情報化社会の中での「新しいモラトリアム心理」の意義を認めると共に危険性を示唆していたのに対して、笠原は高学歴化と「父性」的な社会機能の低下にかなりの力点をおいている。

笠原によると、青年期の延長の原因として、「第一にあげられるのは中産階層化と高学歴化である」「高学歴化とは、しかし、それ自体がとりもなおさず修業時代の延長であり、したがって『一人前』の延期であろう。日進月歩の技術革新は修業時代をたえず延長させ、『一人前』をさらに延期させる」とされる。そして、このような青年期延長と関連した成人たちの反応として、「中産階級化、高学歴化の進展とともに右のような（親の夢をかわりにかなえろといった）古典例の成功度が少なくなり、それと同時に親ないし成人たちは次のような両刃的な困難な仕事を課せられ始めたと思う。つまり、自分たちの文化規範を若者たちに踏襲させる仕事と、若者たちに自らのアイデンティティを求める自由を許容する仕事という二つから、いつからか逃れられなくなってしまった」……『よくわかる。しかし』と答えることが多くなる。父なき時代である。成人と青年を仕切る厳然とした世代間境界の消失である」とやや否定的な見解を述べている。

小此木も笠原も、既存の価値規範が弱体化し、Erikson, E.H. のいう意味でのアイデンティティを確立することが困難になっているという認識では共通しているが、笠原は小此木が述べるほど青年が価値から自由ではなく、むしろ大人社会からの規範への同化圧力と自由を許容する姿勢とのダブルバインド状態にあることを指摘する。このようなダブルバインドは栗原の指摘と重なるものである。

笠原と栗原とを比較した場合、かなり重なり合った現状認識をしているといえるが、栗原があくまでも青年側の体験に内在しようとするの対して、笠原は治療者という半分大人側の立場から論じているように思われる。したがって、「やさしさ」に対しても、「ヤング・カルチャアが中核に含む「やさしさ」志向は超タカ派の成人すら無視しがたい力で今日の文化の中に居座っている」と一定の評価を与えつつも、栗原ほどは甘くはない。笠原はそのような「やさしさ」について「競争し、人を押しつけ踏みつけ、上昇するための努力をもって『男らしさ』とした時代の精神はない」と厳しい。笠原(1977)から以下に少し引用しておく。「退却的反應に代表される『やさしさ』をあまり買かぶることは危険であろう。彼らは、先に何度か述べてきたように、優勝劣敗の不可避な現実的正常の世界から『オリル』という高い代価を支払うことによって、この『やさしさ』を得ている。さらにいえば、彼らのやさしさはその裏に強迫的完全主義的貪欲を隠している」「彼らの発想の根には、自分自身の不確かなアイデンティティという問題がある。『自分で』造り、『自分で』売り、『自分で』顧客の反応をうける、『身近な』人間関係の世界。『自分で』を重ねることによってしか得られない脆弱さ」「彼らだけのことではない。現代の『やさしさ業』にさえ、その一見の他者中心的奉仕性にもかかわらず、自分自身の確認のためにこの仕事しかできないという自己中心性が色濃く混在する傾向がある」。

3. 3つのモラトリアム論の比較

三者の論を対比してみると以下のようにまとめられる。

小此木／笠原

小此木も笠原もともに、社会における規範意識が弱体化したことを青年期の延長の大きな要因として指摘している。しかし笠原は、小此木や栗原が大人社会に対抗する心性として「新しいモラトリアム心理」や「内面化されたモラトリアム」を取り上げたのに対して、そのようなモラトリアム心理自体も「強迫性」という産業社会の論理によってつくられたものであると指摘している。

小此木(1978)の提示した「新しいモラトリアム心理」は、自己中心性は欲望解放的な自己愛性を基本的特徴としていた。これについて、小此木(1981)では「アイデンティティー自我理想＝パーソナルな自己愛」という公式で端的にしめされているように、共有されるべき自我理想を失った現代ではむきだしの自己愛が否定されず、周囲からの羨望や賞賛を浴びることなどのきわめて直接的でパーソナルな自己愛が生きがいとなったと述べている。

これに対して、笠原(1977)は当時の青年たちの心性について、自己の体験が希薄化した「脆弱さ」が基礎にあり、周囲に圧倒されずに「自分自身の確認」をするため他者との交流を限定せざるをえなくなっている傾向を指摘している。

笠原と小此木との違いは、小此木が1970年代に入って本格化した日本社会の情報化・消費社会化の文脈で論を進めているのに対し、笠原は戦後おしすすめられてきた学歴・管理社会化の文脈、笠原(1988)では「キッチリズム」表現されている秩序志向がますます強化されていることを問

題とする。小此木も笠原も、自己中心性や自己愛性について問題にするが、小此木が指摘する自己愛が欲望開放的であるのに対して、笠原の指摘する自己愛は第三者の評価に依存するような自己の脆弱性である。

笠原／栗原

笠原と栗原は共に、管理社会の規範への同化圧力と、自由を許容する大人社会の寛容とがダブルバインド状態にあることを指摘おり、管理社会と自己との関係についてかなり重なり合った現状認識をしている。

しかしながら、栗原が青年の「内面化されたモラトリアム心性」に希望を見ようとするのに対し、笠原がそこに見るのは不確かな自己感覚と、優勝劣敗に対する敏感さからくる現実からの退却である。笠原においては、栗原が管理社会に抵抗する潜在力としてとらえた「やさしさ」も、不確かな自己感覚を他者に承認されることによって補填しようとする自己中心性のあらわれでもある。

栗原／小此木

栗原と小此木の対立点も明らかである。

小此木は情報化・消費社会での青年の欲望開放的な自己愛性を指摘し、同時にそこに人間の新たな「適応」を見ようとした。しかし、栗原は管理社会下で青年たちの主体性が押しつぶされていると指摘し、そのような社会に簡単には適応しない青年たちに「抵抗」を見出そうとした。栗原にとって、青年たちの「内面化されたモラトリアム心理」とは、管理社会と折り合いをつけるギリギリの選択であって、自己中心性のあらわれではない。

しかしながら、栗原と小此木の間には、社会認識についての大きなずれがある。つまり、小此木が1970年代後半に入って本格化した日本の情報化・消費社会化に焦点を当てているのたいして、栗原は高度経済成長期に形成された生産中心主義と安定性長期に入って強められた管理の側面に焦点を当てているということである。また、笠原の焦点も栗原のそれと重なっている。

小此木は、栗原や笠原とはことなり、情報の消費において主体の自由を見出そうとしたが、このような見方は1980年代の消費文化論の基礎ともなった。もっとも、栗原も1980年代に入り、青年と情報化との関連について論じている。しかし、栗原の力点はあくまでも「管理」にあり、情報化についても、若者文化が社会の風景を変容させていく過程と、ソフトな管理が実現されていく過程の二側面を指摘している（栗原1989）。

4. 1980年代以後の青年論

1980年代に入ると、小此木（1978）の指摘したような青年のありようは消費社会やマスコミュニケーションと結びついて常態化しているとされ、「新人類」という言葉が流行した。「新人類」はマスコミュニケーションの情報を自在に操る、規制の価値観にとられない新しいライフスタイルの担い手として語られ、小此木が示したようなパーソナリティはもはや「問題」としてではなく、社会変動にともなう必然的な変化として語られるようになった。しかしながら、このような「新人類論」は若者の一部を戯画化した虚構的なイメージに過ぎなかったという指摘もある（城戸1993、植村1993）。

一方、心理学の領域では1980年代に入ると従来の青年期論の見なおしが盛んに行われ、アイデンティティの問題とともに対人関係の「親密性」の問題が論じられるようになった。

対人関係での親密性については、Erikson, E.H. (1959) は『親密さ』が可能になるのは、適

切な同一性の感覚が確立した後だけである」と述べ、青年期の次に位置する成人期での課題として取り上げている。しかしながら、Erikson, E.H. の理論的枠組みを踏襲したアイデンティティ研究の流れの中でも、Orlofsky, J.L. et al (1973) など徐々に親密性についての研究が進められ、わが国では1980年代になって岡田 (1982) によって検討されている。また、無藤 (1979) は Erikson, E.H. の枠組みを継承した Marcia, J.E. (1966) の Identity Status Interview を日本の学生に施行し、日本人学生において対人的な要因がアイデンティティ形成に重要な役割を占めていることを指摘している。このことについて後に無藤 (1994) は、Erikson, E.H. の理論を基礎にした従来の青年期論においては、アイデンティティの達成の次に親密性の課題が位置づけられているのに対して、「まず独存が達成されたから、それをふまえて親密性・他者との関わりが形成される」という理論は実体に適合していない。いわば両者がたがいに促進し合いながら進行する“人とつながりつつの自己実現”こそがアイデンティティ形成に不可欠である」と述べている。また、村瀬 (1981) も近田輝行の報告をもとに、大学のサークルにおける対人的な関わりが「甘えられる場」として機能し、そのような思春期的対人関係を経験して自己確立していく学生のありかたを指摘し、「退行しながらの自己確立」と表現している。このように青年心理学においてはアイデンティティ形成の基礎として、他者との関わりでの親密性を体験することの必要性が認識されたが、そのような関わりについては「思春期的課題」と表現されることが多い。

このような「親密性」に注目する研究の裏には、青年たちの対人関係の質的变化に対する注目があつた。千石 (1985) は表層的な対人関係と顕示的な自己表現を特徴とする若者たちの傾向について指摘しており、山田 (1989) は「ふれあい恐怖」という表現で、友人関係での深まりを回避する青年たちの存在に注目している。1990年代に入っても、対人関係の深まりを避ける傾向についてくりかえし指摘されており、大平 (1990) は「モノ語り」「モノ化」という言葉で、消費社会における青年に特有な対人関係の持ちかたについて論じている。さらに大平 (1995) は、現代青年にみられる「やさしさ」をキーワードとした対人関係について、自己の傷つきやすさのあらわれであり、それを回避するために対人関係に深く立ちらない傾向でもあると指摘している。このような傾向については栗原 (1989) も指摘しており、他者とわかりあうための「やさしさ」が、他者に深入りしない個人の中に閉じ込められた「やさしさ」に変わったと述べている。また、このように指摘される現代青年の特徴は、「ひきこもり」の青年たちに対しても共通して指摘される特徴である (中村1996)。

下山 (1992, 1995) は以上のような議論の変遷を踏まえて次のように述べている。「わが国においては従来の青年期発達論で前提とされていたとは異なる青年期の発達過程があると考えてみるのも必要かと思われる。というのは、アイデンティティ論を含めた精神分析的青年発達理論は、受験競争がそれほど激しくなく、思春期が自由な役割実験の場となっているアメリカ合衆国の、しかも1960年代に形成された理論だからである」「管理体制の強い日本の社会にあつて青年は、受験という予期的社会化のプロセスが終了する大学入学後つまり青年期後期において初めて自由な役割実験の開始が許されることとなる」「日本の大学生においては、大学入学後に職業決定を積極的に延期し、その延期した期間に思春期の発達課題である自由な役割実験を行うことがアイデンティティの基礎の形成、さらにはアイデンティティの確立に結びつく場合もあると推論できる」。ここでは、先に検討した栗原 (1981) や笠原 (1978) と同じように、管理社会にモラトリアム問題や対人関係の希薄化の原因が求められている。しかしながら、千石 (1985) や大平 (1990) のように情報化・消費社会化との関連で現代の青年心性を論じている論者も多く、社会

の管理的側面についてのみ強調し、情報化や消費化の側面を見落としてはならないであろう。

5. モラトリアム問題の構図

1970年代後半に論じられた三者のモラトリアム論においては、自己中心性／自己の脆弱性、社会適応／社会への抵抗、連帯へ向かうやさしさ／自己確認のための貪欲さ、という対立が見られた。三者の論を青年の「自己」についてどのように語っているかという点から端的にまとめると以下ようになる。

小此木：モラトリアム人間は欲望解放的な自己愛に満たされている

栗原：青年の自己は管理社会に押しつぶされようとしており、連帯を求めている

笠原：管理社会下で、自己感覚は希薄化し、第三者にたよって確認されることを求めている。

図1. 小此木・栗原・笠原における青年の「自己」

小此木と他の二者の違いは、小此木はいちはやく消費社会という流動的な側面に着目したのに対して、栗原と笠原は管理社会という強迫性について強調したことである。しかしながら、情報化・消費社会化という側面と、管理・競争社会という側面は重層的なものであり、ともに1980年代以後を生きるわれわれにとって我々にとっての現実的なものである。つまり、2つの異なったリアリティが、同一の個人において体験されていたと考えられる。

1つ目のリアリティは管理社会におけるリアリティで、他者との関係が分断され、自己の体験が希薄化されているというリアリティである。

2つ目のリアリティは情報化・消費社会におけるリアリティで、自己の欲望が満足され、自己愛が肥大化しているというリアリティである。

ただし、栗原においては、情報化や消費社会化も広義の「管理社会」の枠組みの中でとらえられており、青年の「生ける自己」「体験」を希薄化させていると考えられている。

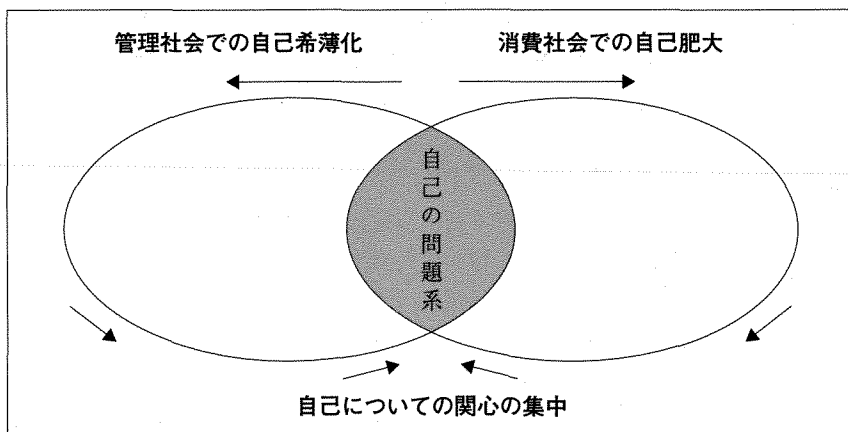


図2. 「自己」についての問題系

この2つのリアリティは「希薄化」と「肥大化」という反対のベクトルとして語られているが、共に「自己」についての強い関心を引き起こす点では共通している。このような力動の場合、「自己」の同一性（アイデンティティ）に強く関心をもちながらも、その背後では引き裂くベクトルが働いているため、同一であることが非常に困難になることが予想される。このような視点から見ると、「モラトリアム問題」「アイデンティティ拡散」といった言説は、相互に矛盾したリアリティを「自己」「アイデンティティ」という概念のもとに統合しようとする苦闘であったと考えられる。しかもここには、二つのリアリティに引き裂かれ同一であることが困難であればあるだけ自己への関心は高まるという運動と、自己への関心が増大するだけ引き裂かれ感も増大するという運動の悪循環が働くと考えられる。

1980年代以後のアイデンティティ研究においては対人関係について問題にされ、アイデンティティ形成の基礎として対人関係での親密さが論じられた。特に村瀬（1981）や下山（1992, 1995）は、高度学歴競争下において思春期的対人関係を結ぶことが困難になっていることが、アイデンティティ形成を困難にしていることについての指摘し、モラトリアム期間における思春期的対人関係のやりなおすことの有効性を述べている。

また同時期には、青年たちの対人関係の希薄化についての指摘も多く出されている（千石1985, 栗原1989, 大平1990）。この問題については、主に情報化・消費社会との関連で論じられており、大平（1990）は、自己が傷つくことを恐れて他者との摩擦を避け、「モノ」を消費することに自己の充実を見出そうとする傾向について指摘している。

いずれにしても、1980年代以後の青年論においても、先に指摘した二つのリアリティに引き裂かれた構図の延長で言説が展開しているといえるであろう。特に大平（1990, 1995）は、自己の希薄化というリアリティと、消費による自己の充実というリアリティに引き裂かれた構図を端的に描き出している。

第2章 インタビュー

1. インタビューの目的

第1章では代表的なモラトリアム論について検討し「問題の構図」を描き出したが、本章では、いわゆる「モラトリアム」状態にある青年、具体的には調査の対象は何らかの理由で在学期間を延長した大学生に対するインタビューを行い、彼らがどのように自分のおかれた状況を捉え、どのような方向性を描いているのか検討する。さらに、ここから現代の大学生における自己と社会との関係における「問題の構図」を描き出すことを目的とする。

2. 在学期間の延長について

大学生の在学期間の延長については最初「留年現象」としてクローズアップされた。大学紛争に数年先駆けた昭和30年代後半、その頃の留年は入学後1, 2年でおこる「教養留年」であった。それに対し、昭和40年代中頃から卒業を先延ばしにする「卒業留年」が目立つようになってきたとされる（土川1978, 藤土1978, 岨中1981）。

留年は、戦後の大学の大量化とともに増加していったと考えられている。当初は高度経済成長の下でのいつでも就職できるという「甘え」が留年原因だと主張されていたが、経済成長が収束期に入ってから留年が増加の傾向をたどっていたため、一種の「社会問題」として考えられる

ようになった(遠藤(郁)1978)。この現象を理解していく中で、留年が必ずしも学力不足を原因にするのではなく、学力優秀者の留年が多発していること、学生の目的意識の希薄化あるいは無気力化との関連などが論じられた(土川1978, 宮川1978, 藤土1978など)。特に笠原(1973)は長期留年者の心理的傾向を指摘し、「スチューデント・アパシー」というカテゴリーを提案した。このスチューデント・アパシーという概念はその後、留年の心理的背景を理解する基本的枠組みとなっていった。また、第1章で検討したように、小此木(1978)や栗原(1981)は留年について青年期の遷延化の顕著な例として捉え、Erikson, E.H. の「モラトリアム」についての考えを参考にして論を進めている。

1980年以降、留年現象は常態化し、それ自体は特に問題視されなくなっている。また、「休学」「留学」といった形での卒業延長も増えており、学生生活が多様化していることも指摘されている。

3. 方法

対象: H大学の大学生で、留年もしくは休学の経験のある5人(男性3人, 女性2人)を対象に行った(ただし, 1人は調査の3ヶ月前に自主退学)。

期間: 調査は平成7年秋に行われた。所要時間は1人に対して120分程度要した。

方法: 調査票をもとにした半構造化されたインタビュー形式で行った。

調査票: 調査票は、Marcia(1966)のIdentity Status Interviewを翻訳した無藤(1979)の質問項目に、Orlofsky(1973)のIntimacy Status Interviewを翻訳した岡田(1982)の質問項目を加えた調査票を元に予備調査を行い、さらに予備調査の対象者の意見を取り入れて作成した。

4. 結果

A嬢 23歳 女性 5年時休学

とにかく家を出たくてこの大学へきた。この大学はどの学部にするかを入学してから決めればいいので、学部と専攻については入学後に決めた。

(休学)

2年生の終わり頃から休学を意識し始めた。そのころ「自分は大学に入っても何もやっていない、これからとてん式に卒業しても、自分のやりたいことをやっていけるのか…」と思っていった。休学をして、「何もやってきていない」という焦燥感から、いろいろやってみようとピックアップはしてみたけれども結局は何もできていない。自分とか家のことを考えてすごしていた。

そのまま休学せずに卒業してもだめだったと思う。小中高と優等生でできてしまったことが「劣等感」になってしまっていて、一度「与えられた積み木」を積んでいくのをつぶしてみたかった。休学して社会で働くのを先延ばしにしたいというのもあった。それは今までのように社会に適應して「いい子ちゃん」をやってしまうのが嫌だったから、母は休学に対して肯定的だったけれど、父からはそれまでずっと何もいかなかったのに、そういう時だけ「まっとうに生きろ」と言われて複雑な気持ちだった(最終的には好きなようにさせてくれた)。今年になって、このまま大学にいてもしょうがないと思うようになった。

(社会)

テレビとかから伝わってくる事件は物珍しさはあっても、リアルさは感じない。それは、ベルリンの壁の崩壊や湾岸戦争の時に、世界は動いているのに自分は「受験」という現実にいるとい

うことに、自分と世界の「ずれ」を感じたこととか…（こういう感覚は）高校生のころから感じてきた。政治や社会問題について当事者意識を持つてはなすことはない。全人類が幸福を感じるユートピアなんてないと思う。政治よりも、自分と他人の関わりのほうがずっと切実な問題。

（価値観）

生きていく上で大切だと思うのは「愛」。他人を自分とは違う存在と見とめた上で認めて、お互いの「孤独」を尊重して支えあっていくというか…。子どもの頃に聖書を読む機会が合って、その時に「隣人を愛せ」といいながら神自身は人を罰するということに矛盾を感じてから「愛」について考えるようになった。

価値観や人生観については、高校の先生と大学のある先生から感銘を受けた。大学の先生との出会いは、今まで正しいと考えてきたこと（学校制度など）が必ずしもそうではないんだと考えるきっかけになった。

（友人関係）

教養過程のころから親しくしている何人かの友人はいるが、参加しているサークルでの交友関係はそれほど深いわけではない。友人との関係では、接する人ごとに合わせてしまうところがあって、そういうところが偽善的だと思う。いろいろな人に合わせる自分自身が見えなくなるようなところがある。自分に都合のいい人だけではなく、いろいろな人に対して、その人を認めていく「愛情」が必要だと思う。異性に対してはどっか下手に出ているような気がする。対等に接していきたいと思う。

（職業）

就職を決めた理由は、「もう大学にはいたくない」というのと、経済的に親がかりになっているのは何か「かせ」をはめられているような機がして嫌だったということ。就職活動は「まあ決まらなくても…」という感じだったけれど、運良く決まったという感じ。就職先へは魅力を感じるけれど、やっていけるか不安もある。これからまだ考えたいことはいっぱいあるけれど、就職先の職場は本に囲まれた環境だから、その点では安心できる。「いい職業」というのは、その人が好きでやって行けたら一番幸せなんだと思う。就職先については、母は喜んでいる。父は昔から自分を超えられたくないというのがあって、私が希望するもの（就職先は有名企業）に肯定的ではなかった。

B氏 23歳 男性 5年時留年

この大学へは、国立大学に行けば親が喜ぶし、家から近かったし、まあこの地区の高校にいれば「この大学ならOKでしょ」っていう感じがあるし…。自分のやりたいことに近いので専攻を選んだ。やりたいことは、高校の頃からなんとなく自然と決まってきた。

（留年）

「留年」というより、卒業しなかった。働くのもピンとこなかったし、卒業したくなかったんだと思う。経済状況が恵まれているから「働かなくても…」って思っているし、いろいろ事務手続きがめんどくさいなと思っていたら（留年に）「なっちゃった」。父も弟も留年経験があるし、「いいじゃん」という感じ。余裕ができた時間は、旅行をしたり、バイトをしたり、あと一日一本映画を見たり…。高校生の頃から感じているけれど「無風状態」というか、時間は流れているという実感はない。映画を見ていると繰り返してないものを感じる。留年はほめられたものではないと思うけれど、別段後悔していない。家の中では留年については問題にならない。

(社会)

社会的な問題については、直接自分に関係ないし、どっか人事だなと思うところがある。政治のことなど友人と話すことはあるけど、みんな無関心なのに驚く。何でこんなに「関係ない」と思ってしまうのだろうかということが問題となる。

「天安門事件」はみて悲しかった。世の中に対して気にくわないと思うけれど、天安門の学生のように何かしようとは思わない。それは、みんなで集まって何かしようというのが胡散臭くて信じられないから。天安門の学生たちのやりかたは何か違うと思ったけれど、じゃあどうするというところは考えない。けれど、あの事件はショックだった。中学の頃は「汚職はだめだ」とか言えたけれど…今はそう言えることへの懷疑が深まってきた。

政治については、すごくシステムができあがっているから、文句を言いたいけれど、そんなことできるのかなあって。誰が正しいかなんて決められないし、ボスニアの話なんかでも、まったく違う原理で動いている人たちどうしがどうやって対話していけばいいのか…。まったく原理が通じないっていうのは、対人関係の経験から感じるようになった。「世の中」っていわれると、自分のまわりにいる人々のことが思い浮かぶ。周りの人とどう関わっていくかが大事。

(価値観)

趣味的なこだわりはあるけど…生きていく上で大切にしていることはこれとってない。敢えていうなら「疑ってかかる」ということを大切にしている。人生観がないのが自分の「売り」になっているところがある。自分にとって大事なものは、趣味的な部分的なこだわりで、そういう点については細かい方だと思う。決定的に影響を受けたものというのはないけれど、周りのいろいろなものから少しずつ影響されている。

両親の価値観については「まあなるほどね」と思う。他人に迷惑をかけなければ何してもいいよって、子どもにも押し付けなかったのは偉い。

(友人関係)

親しくしている友人は何人かいるけれど、「親友」といわれると実感がわからない。友人とはいえ理解できないこともあるわけで…。サークルには1年生の頃少し入ってたけれど、時間が拘束されるのが苦痛で…。グループに入ればやっていけるけれど、グループに所属するのは手段でしかないと思う。

中学の頃は、周りに気の合う友達がいなかった。でもまあ、別話をすればいいやって、深くは悩まなかった。今は、人との関係で「楽しんでいただけただしょうか」みたいなことを思っていたりする。

異性については、「好きでいるために好きでいる」というのは避けようと思っている。その瞬間にその人が好きだったら、それが一番大事。どんなに親しくてもその人は自分とは違う。

(職業)

(将来の職業については)何だろう? 天職はすぐには見つからないと思う。バイトだって面白けりゃ、つまらない正社員よりいい。映画とか自分が面白いと思っていることに生産的に関わっていけばいいと思っているけれど、現実感はありません。だったらその方面で職を探せばといわれても…選択すると一つになっちゃう。

両親は自分で暮らしていけるなら何やってもいいと思っているみたい。

この大学に決めたのは、高2くらいのときから「都会を出たい」と思い、自然豊かな環境にあこがれていたのがある。専攻は教養部の間に考えればいいというのも良かった。どの学部にするかは移りのぎりぎりまで迷っていた。これがやりたいというものにはなかったが、学部の雰囲気とかで…。専攻は広い範囲を扱っているものを選んだ。

(休学)

2年生から部活に入って、4年間続けてやっと一人前になれるのだけれど、自分は1年余分に大学生活を送らないとまっとうすることができなかった。家庭の事情もあって妹の世話をしたり、これから進路を模索したいというのもあった。休学した時間の1/3は部活動に費やしていた。後、仕送りがなくなったのでバイトをしたり、海外へ行ったりもして、なんだか忙しかった。

休学している間、大学へ行くことに何か意味があるのかということを考えていた。OBやヒッチハイクで乗ってもらった人の話とか聞いて、「大学で何もやってませんよ」じゃだめで、自分のやっていることに自信をもつことが必要だと思った。

この大学はそういう（休学や留年する）人も多し、休学したことに後悔はしていない。親も特に良くないとは思っていない。それは、授業料も払っていないのだから当然だと思う。別にみんなストレートでいかなきゃいけないと思わないし。

(社会)

社会的・政治的なことにはあまり関心がない。自分の生活にあまり影響してこないから。政治に関しては、いろいろと汚いところがあると思う。それを変えていきたいと思っているが、実際に直接動くということはしていない。それよりも毎日自分が関わっている世の中を清くしようと…たとえばゴミとかの資源の無駄の問題とか…みんなが明るくて楽しい世の中になればいいと思う。社会的な活動へは参加していないけれど、学生寮の自治会などに参加することが社会的な活動だと思う。

(価値観)

自分に恥ずかしくない、偽らないことを大切にしている…。自分なりにまじめに考えるってことかな。大学に入るまでは、大学に来る意味なんて考えなかった。良くも悪くも親にしつけられたから「大学は行くもんだ」って思っていた。けれど、寮で共同生活をしている中で、そういったことで悩んでいる人とあった。そういう人と部活や寮生活でつきあっていく中で、その都度その都度、しっかり考えることが必要だと思うようになった。

親の考えは、独善的だと思う。でも、いいところはもらって、悪いところは見習わなければいい。

(友人関係)

友人は寮で生活しているの沢山いる。前は、共同生活はお互いに磨き合う場だと思っていたけれど、最近はしっかりと生活していく場所だと思うようになった。共同で生活することはなぜだか魅力がある。お互いに頼り頼られる場で、温かさ、楽しさがある。人は決して1人では生きていけないのだから、人間が関わり合えるという点でいい。

部活の魅力は、みんなで協力して困難をのりこえ、またそれを楽しむということ。そんな中で、みんな自分とは違う性質をもっているんだなあって実感したり…。運営していくってことが、一筋縄ではいかない大変なことだっというのもわかってきた。

友人との関係では、他の人たちの関係を見ていて、自分はあるに友人のことを思えないんじゃないかって悩むことがある。相手に迎合することなく、お互いに批判しあって、お互いに

「生きている」ことを実感できるような関係がいいと思う。異性についても、同様に、男女の別なくつきあっていきたい。

(職業)

研究者とか。何か理想とかテーマをもって、それを妥協せずにやっていけるということが大切。企業の方針とかにそれを曲げられてしまうのはよくない。会社へは嫌悪感がある。同じようなスーツを着て…っていうのもどうかと思う。こう考えるようになったのは父親の影響で「すりこまれた」と思う。父親のいうとおりにはしたくないけれど、やはり今の自分の価値観は父親の影響を受けている。反発することを押し込められてきた。最近は父も口出ししなくなってきた。

D嬢 23歳 女性 5年時留年

この大学に来たのは地元の国公立大学で、入試科目で受かりそうだなと思ったから。大学1年生の頃この学部について調べているうちにこの学部がいいなと思った。この学部が一番やりたいことに向いていると思った。大学2年の頃からやりたいことを意識し始めた。

(留年)

卒論に取り組んでみたけれど、9月ころから「もうこのテーマではできない」と思って留年することにした。でも、これは表面的な理由で、本当は「逃げてるだけだったんだ」と思う。卒論のテーマは卒論検討会があるから直前になってあせて決めた。その後はそれに縛られて…。卒業後の進路は選ばなければいけないけれど、自分で納得のいく職業を見つけたいと思って…友達から、「新卒のほうが就職に有利だよ」っていわれて留年することに決めた。

ひとつひとつ前のことをこなしていかないと進めないから、とりあえず卒業はしようと思っただけだけれども、今年も何もしていない。自分が何をしたいのかを見つけるために習いものとかにも通ったけれど、結局自分の求めているのはこれではないと思って。1年前と一緒に、自分が何をしたいと思っているのかわからない。…見つけようとしていないのかもしれない。でも英会話とか、趣味で続けたい講座はある。それが自分のやりたいことかはわからないけれど、やっていて楽しい。

留年について、表だって何かを言うのは母だけ、父は私にそのことで何かいうことはない。友人を見ていると、みんな自立しているんだなと思うけれど、仕事の愚痴とか聞くと、やっぱり私は自分のしたいことしようって。

(社会)

オウム的事件やフランスの核実験、あと地震（阪神大震災）などが記憶に残っている。人間を人間と思わないところが許せない。核実験に対しては、自分が住んでいるところを汚して…。「奢りたかぶるなこの野郎」って思う。

政治に関しては自分でも不思議なくらいに関心がない。政治なんか誰がやったって変わりがなし、こっちには影響してこない。政治家の人たちは、自分のことしか考えていないから信じられない。だから、選挙にも行かない。

世の中には、誰か中心がいて…とかいう体制はできなくてもいい。みんなが好きなことをやっているけれど、周りとの調和してやっていけるような…。「調和」という言葉が好きで、それが大切にされればいいと思う。世の中から、だんだん本来あるべき「調和」がなくなっている。世の中が良くなるためには、一人一人を敬って、そのまま受け入れていく「愛」が必要だと思う。今の世の中には愛が足りない…。

(価値観)

すべてをありのままに受け取って価値判断をしないこと、すべてを包み込んで許すような「愛」が大切だと思う。シャーリー・マクレーンの本を読んでそう思うようになった。昔は自分について考えたことはなかった。ルールに乗っていたから…。そう思ったのは大学生になってから。

両親は「物質的な豊かさは置いておいて、普通の生活で満足できたらいいよね」という価値観を持っているみたい。気がついた時は一致していた。実践の仕方が違うけれど。

(友人関係)

人と深くつきあうのも楽しい。けれど、1人でのいるのはそれはそれで…。もともと、人と関わりをもたなくてもわりと気にならない。友人との関係ではあまり喧嘩とかはしないけれど、傷ついたりすることはある。でも、まっいいかと思えばそれはそれで流す。流せない時は、そのことについてお互いの気持ちを話し合う。

(職業)

漠然とは、福氏関係の仕事に就きたい。でも、事務仕事は自分の意志なくただやっているという感じで…あまり気が進まない。自分ができる、他の誰かではなく私ができることにこだわっている。両親は、お前の好きにすればいいといっている。

E氏 25歳 男性 留年の末7年時中退

この大学は高校生の頃から志望していた。東京の大学はお金もかかるし考えていなかった。経済的な理由から、私立大学に行くことや浪人は許されていないと思っていた。地元だし、国公立ならどこも同じ…。共通一次試験の点数が思ったより良かったから…。専攻は学部に入った頃にはもうほとんど大学に来なくなっていたから…。

(留年・中退)

留年の直接の理由は、必修の科目を落としたから。部活に留年した人がいっぱいいて、留年に対しておおらかっていうのもあった。初め留年した時は「困ったな」って思ったけれど、2回目からは「1回も2回も同じ」って…、その辺の感覚が麻痺してきたのかもしれない。

時間に余裕ができた分は、怠けてぐうたらしていた。1日1冊本を読んだりビデオを見たり…。自分が何をしたいのか、そのうちわかるだろうと考えていたけれど、まだわからない。自分は熱が冷めやすいので、「これ」って思ってもすぐに違うなって思う。

留年したことについては後悔していない。訳もわかんないまま勉強しているよりかはいい…と思うことによって納得していたのかもしれないけれど。そんなに急いで就職しても仕方がないと思うし…。

留年して初めは家族と気まずかったけれど、今はあきれて何も言わない。父はあまり何も思っていないようだが、祖父母や母は怒っていると思う。でも、はっきりと怒ってくれなかったから、こちらも曖昧にごまかしてしまって後味が悪い。はっきり怒ってくれたほうがよかった。親戚の人たちには顔向けしにくい。

留年していても、やりたいことは見つからないだろうと見切りをつけて中退した。他の人を見て、急いで就職をすることはないと思う反面、やはり後ろめたさを感じていた。停滞している状態から、早く何か次の行動へっていう焦燥感があった。やめることで親から完全にフリーになって、すごく気が楽になった。やめる時には、これで何かが変わるかなって思ったけれど、まだ先

のことは見えてこない。保険などの保証がなくなったのでリスクを感じているけれど…今は身の回りのことをこなしていくという感じ。

(社会)

自民党が野党になったことや、地震の事件には驚いた。ずっと続くと思っていたことが、いきなりバタッと変わって、自分の中の常識が覆された。でも、政権が代わっても結局何も変わらないし、政治については「何をやってもどうせ変わらないだろうな」って諦めている。考えたくないって感じ。

世の中はどうなってもいい。運命論者みたいだけれど、何かどうしようって思っても、人間がどうこうして変えられるものではないって感じ。

政治的・社会的な考え方は、誰からも影響されていないけれど、こういう考えになったのは大学に入ってから。

(価値観)

生きていく上で大事なものは、夢とか希望とかかな？ いや、オリジナリティだな。みんなとは違うっていうこと。みんなと同じように就職しても先が見えちゃう。他人と一緒にじゃつまんないから…。周りの人がみんな同じように就職活動をして就職していくのを見ていると「変だな」って思う。

具体的に出会ったいろんな人たちと衝突したりしながら、そこで考え方が変わってきた。人生観の大きな転機になったのは、22才になって祖父の葬式で初めて生の死体を見たとき。何だか良くわかんないけれど怒りがこみあげてきて…「ああ、死ぬんだな」って思った。でも、死んだらそれで終わりじゃなくて、まわりに残された世代に続いていく…。じゃあ、どこまで自分が自分でいられる人生かって、「人生」というものについての考えをかき集めた。そういうことを、迷いながらも、就職していった友人に手紙を書いたりしながら考えた。

自分の育ってきた家庭は理想に近い。祖父母をみんな尊敬していて、祖母と母とも仲が良かった。父はたまに大きく怒って…円満であった。いい家庭だったと思う。

(友人関係)

人付き合いは、部の関係の人と（今年の4月から）共同生活をしているから、部関係の人とよく会う。共同生活をしていなかったらもっと引きこもっていたと思う。家に帰って誰かがいるのはうれしいですよ。

部の影響は大きい…。学校があまりにもつまらなくて、部があまりにも面白かった。授業にはいないような面白い人間がいっぱいて、憧れに近い尊敬みたいなものを感じた。そんな中で客観的に自分を見ると「つまらない」側の人間だった。

人との関係で大切なのは「信用」かな？ 安心してものを任せられるとか、相談されたり…困った時の最後の砦だと思う。異性も同性もあまり区別してつきあおうとは思わない。

(職業)

まだ何をしたいのかわからない。心の奥ではいつか農家になれたらいいなって思っていて、農業センターにいったりして調べてみたけれど、やはり無一文からでは無理だ。農業をすれば、田舎で暮らせる。都会には本質的に気を許せないところがあって、一生は住みたくない。それよりも自然と触れ合っていたほうが落ち着く。

自分で汗を流して、直にものを作って売る。そういう職業がしたい。金融とか、どこで金ができているのかわからない職業は、胡散臭くて働いているって感じがしない。そして、夕食を家族

で食べられること。家が製造業をしている影響が強いと思う。

5. 考察

卒業の延長

A嬢・C氏・D嬢・E氏の4人は、留年や休学を機会に、自分のやりたいことを探そうとしていると述べている。その意味で彼らは、熱烈にアイデンティティを希求しているといえるであろう。しかしながら彼らにおいて特徴的に語られるのは、大学生生活の間に自分たちが何もしてこなかったという感覚であり、大学生生活を延長して自分の打ち込むべきことを希求しては見たものの、何かをつかんだという感覚は希薄である。彼らのアイデンティティ希求は、現在の自分への<違和感>と表裏をなしていると考えられる。

彼らの言葉を並べてみよう。「いろいろやってみようとピックアップはしてもたけれども結局は何もできていない」(A嬢)、「結局自分の求めているのはこれではない」(D嬢)、「自分が何をしたいのか…まだわからない。…『これ』って思ってもすぐに違うなって思う」(E氏)。このように彼らは、強烈に「自分のやりたいこと」にこだわっているにもかかわらず、その「自分のやりたいこと」は「これではない」という<違和感>としてしか感じ取られていないのである。

しかしこの<違和感>は彼らの存在を規定する大きな要因である。そしてこの<違和感>は学校制度や受験システムと関連して次のように語られている。「小中高と優等生でできてしまったことが『劣等感』になってしまっていて、一度『与えられた積み木』を積んでいくのをつぶしてみたかった」(A嬢)、「大学へ行くことに何か意味があるのかということを考えていた」(C氏)、「訳もわかんないまま勉強しているよりかは(留年している方が)いい」(E氏)。またD嬢は、自分で納得のいく選択をできないままに、卒業論文、就職というように期限がたぎつぎとせまってくる焦燥感について述べている。これらのことから、4人にとっての留年や休学は、自分の意志とは関係なく、決まった期限までに課題をこなしていかなければならない現実に対する<違和感>の表現として、限界まで適応して立ち止まらざるをえなかったということのあらわれとして語られている。

B氏は他の4人とは少し趣が異なる。彼の場合は、自分の留年について得に意味づけはなされていない。特徴的なのは、現在の時間感覚について「無風状態」「流れているという実感が無い」と表現していることで、彼にとって毎日は同じことの繰り返しとしか体験されていないようである。このような状態から脱出する糸口としては、「映画を見ていると繰り返しでないものを感じる」ということが語られている。

社会

「社会的・政治的なこと」に対する関心は、すべての対象者において希薄で、次のように表現されている。「リアルさを感じない」(A嬢)、「どっか人ごと」(B氏)、「あまり関心がない。あまり影響してこないから」(C氏)、「不思議なくらい関心がない」(D嬢)、「考えたくないって感じ」(E氏)。また、このような社会システムに関わりを意識することは困難になっており、それを「自分と世界とのズレ」(A嬢)、「文句いいたいけれど、そんなことできるのかなって」(B氏)、「影響してこない」(C氏・D嬢)、「何をやってもどうせ変わらない」と語っている。

もはや社会的・政治的な領域は、自分たちの力のおよばないものとして考えられており、また、社会的・政治的動向も自分たちに直接影響してこないかのように体験されている。彼らにとって

社会や政治といった事柄のイメージは、まったく手ごたえのないものであり、反発する対象とはなり得ない。あるいはB氏やE氏の述べるように、「どうせ変わらない」という諦めや無力感が先に立っているとも考えられる。Erikson, E.H. は青年期の課題として「社会のなかではっきり位置付けられるようなパーソナリティを、自分は発展させつつあるという確信」として自己アイデンティティを確立することをあげたが、そのような解決は困難になっている。

このような状況の中で、身近な人々との関わりが注目されている。それらは、「自分と他人との関わりの方がずっと大切な問題」(A嬢)、「周りとうどう関わっていくかが大事」(B氏)、「自治会などの活動に参加することが社会的な活動だと思う」(C氏)、「一人一人を敬って、そのまま受け入れていく『愛』が必要だと思う」(D嬢)と語られている。また、E氏においても[友人関係]の項で見ると、対人関係が人から承認されることが重要関心事として語られている。

以上から、対象者の現実についてのイメージは、社会的・政治的な領域においては希薄化しており、この希薄化は無力感を伴って体験されているようである。社会的・政治的な領域で「手ごたえ」のなさが語られるのとは対照的に、自分の身の回りの人間関係については集中して語られている。

価値観

価値観については、「愛」(A嬢・D嬢)、「趣味的なこだわり」「疑ってかかること」(B氏)、「自分に恥ずかしくない、偽らないこと」(C氏)、「オリジナリティ」(E氏)というように、一見さまざななことが語られている。しかし、すべての人物に共通して、常識に対する<懐疑>とでもいうべき感覚が語られており、各人の価値観はこの<懐疑>の関係で展開されていると捉えることができる。この<懐疑>は、先に述べた<違和感>と通じている感覚であると考えられる。

A嬢・C氏・D嬢・E氏の4人においては、進学から卒業というレールの上の人生についての<懐疑>あるいは<違和感>として、次のような感覚が語られている。「大学の先生との出会いは、今まで正しいと考えてきたこと(学校制度など)が必ずしもそうではないんだと考えるきっかけとなった」(A嬢)、「『大学は行くもんだ』って思っていた。けれど、寮で共同生活をしている中で、そういうことで悩んでいる人と会った」(C氏)、「昔は自分について考えたことはなかった。レールに乗っていたから…」(D嬢)、「周りの人がみんな同じように就職活動をして就職していくのを見てると『変だな』って思う」(E氏)。彼らは、当たり前のこととして大学へ進学し、就職して行くというレールに乗っていたのだが、大学生活の中でそのような自分のままでいいのかという<懐疑>を抱くようになったと考えることができるであろう。それまで受動的に受け入れてきた常識をひとまず「括弧に入れ」、能動的に自分の価値観を模索していこうとする態度がうかがわれるともいえるが、それは必ずしも力強いものではない。B氏の場合はさらに徹底している。彼は自分の価値観を持つということ自体に懐疑的であり、あえて価値観を持たないことを心情としている。彼にはあらゆる意味で価値観を打ち立てることに対する絶望に近い感覚を持っていると思われる。

このような学歴社会の価値観に対する<懐疑>を共有した上で、価値観について、各人は次のように考えている。A嬢とD嬢は共に「愛」を大切なことであると語っている。A嬢は「神の愛」に対する違和感から、人間同志が異質なものとして相互に認め合うような「愛」を語り、D嬢はすべてを価値判断せず「包み込んで許すような『愛』が大切だと思う」と語っている。A嬢

の「愛」とD嬢の「愛」とはニュアンスが多少異なるが、異質なものの同志が共存していく道を目指そうとしている点では共通しているといえるであろう。

B氏とC氏は共に、自分の直接体験している生活に根ざすことに価値観を見出している。ただし、B氏が「趣味的な部分へのこだわり」というように個人的な感性をたよりに模索しているの対し、C氏の模索は対人的なやりとりを契機として出発しているという点では対称的である。

E氏は「オリジナリティ」に価値を置くと語る。彼は、祖父の死を契機に「自分が自分でいられる人生」について考えをめぐらしたことが、今の価値観を持つきっかけとなったと語っている。その上で、彼は友人が同じように就職していくことに違和感を感じ、自分だけは固有の人間でありたいと固執しているといえるであろう。このような態度は、ある意味で、自分だけが特別でありたいという自己中心的態度ともいえるが、それは「自分が自分でいられ」なくなってしまうことに対する恐怖の裏返しであるともいえるであろう。

友人関係

人との関わりという観点からは、A嬢とB氏において、対人関係でのスタンスのとりかたというテーマが語られている。A嬢もB氏もともに<人に合わせること>、つまり他人を前にしてどのようにふるまうべきかを重視しているが、方向性は対称的である。この<人に合わせること>は、相手の期待を読んでそれに合わせていこうとする態度であるが、このような対人様式では、「私がやりたいことは、相手から望まれるこのである」というように、存在の根拠が他者の視線の前に無化してしまう。

A嬢は「接する人ごとに合わせてしまうところがあって、偽善的だと思う」と語っている。「偽善的」という言葉からは、その場その場で一貫しない自分のありかたに対して罪悪感を感じており、自己の一貫性を希求していることがうかがわれる。また、彼女はここでも「いろんな人に合わせる自分自身が見えなくなる」と語っており、周囲の期待の前で「自分」が希薄化していくような感覚を体験しているようである。ただし、彼女において特徴的なのは、その場その場で都合よくふるまっていて自己の一貫性をもてないことについて、自分に都合よく人と接しているという利己的な側面のみが強調されおり、問題を自分の内部で解決しようとしていることである。このような状況からの抜け道としてA嬢は、他者を自分とは切り離されたものとして認めていくことが課題として語っている。

これに対してB氏場合、そもそも対人関係での一貫性をもとめないことが、A嬢のような葛藤状態に陥ることを防いでいるようである。B氏においては「楽しんでいただけましたでしょうか」というように、その都度相手の期待にこたえていくことが積極的関心事になっている。しかしながら、B氏は<人に合わせること>という対人的方略について語りながらも、他者と心をかよわせるということには懐疑的である。「友人とはいえ理解できないこともある」「どんなに親しくてもその人は自分とは違う」というような、他者との断絶を前提にした、独特のコミュニケーションに対する懐疑が語られている。また、彼の場合は、A嬢が<人に合わせること>を場渡り的に一貫性に欠くものと語っているのに対し、「その瞬間にその人が好きだったら、それが一番大事」というように、自己の一貫性よりも感覚の重要性を強調している。

C氏には、A嬢やB氏とは対称的に、人と心をかよわせることに対する確信が感じられる。この確信は、学生になってから、「寮」や「部活動」という集団生活をとおして「あたたかさ」「楽しさ」「協力することの喜び」を感じてきたなかで培ったものである。C氏も他方では、「み

んな自分とは違う性質を持っているんだなあ」と語っているが、この言葉は人と人とは通じ合えないという認識からくるものではなく、お互いに通じ合うことができるという確信の上に、個人の個別性を発見したこととして理解できる。

E氏の場合は、今の段階では人との親密性が失われていると感じており、それを対人関係で承認されること>によって取り戻そうとしている。他者からの承認にこだわるという点ではA嬢に似ているが、A嬢がどうも巡りの解決を承認されること以外に求めているのに対して、E氏は承認され「信用」を築くことにあくまでもこだわっている。B氏とは、人と通じ合うことの困難さという点では共通しているが、B氏が通じ合うことを諦めているのに対して、E氏はそれを諦めていない。C氏とは、部活動や共同生活に人との温かい交流を求めている点では共通しているが、C氏がそこから他者との一体感を獲得していったのに対して、E氏は失われた一体感をそこに求め、それが得られずにふたたび絶望の淵んでいる。彼は「信用」を「最後の砦」と呼んでいるように、他者から承認されること>つまり人_に合わせることを中心に置いた対人様式で、他者との一体感を幻想的に復活させようとしていると解釈できる。しかしそれは、先述のように「私がやりたいことは、相手から望まれるこののである」というパラドクスのなかで自身を空虚にしていくということでもある。

D嬢は、友人関係について特別に困難を語っておらず、またC氏のような情熱も語らなかつた。彼女にとっては、友人関係はごく当たり前のことであり、あえて意識化されることも少ないのかもしれない。ここから逆に、A嬢・B氏・C氏・E氏の友人関係についてのこだわりが浮き彫りになるともいえるであろう。

職業

A嬢は「もう大学にはいたくない」「経済的に親がかりになっているは『かせ』をはめられているような気がして嫌だった」という気持ちが、卒業への大きな動機になったと述べている。しかし、A嬢にとって自己探索は終了したわけではなく、彼女は職場の環境は引き続いて自己を探索できる場をととしてとらえられている。他方、彼女の考える「いい職業」について、「好きでやっていけたら一番幸せ」とも語っており、自分の進路選択が「好き」という感覚にそっているということに着地点を見出したようである。

C氏は「理想」に重点を置く。彼は企業社会への嫌悪感を語り、自分の理想を追求する道として「研究者」を見出している。しかし彼の場合、企業社会に対する嫌悪感も、研究者という道も、彼の父親と同じ生きかたである。父親に反発しながらも、結局は父親をモデルに着地点を探っているともいえなくもない。

D嬢は、「漠然とは、福祉関係の仕事に就きたい」と語っている。彼女は、福祉職を志望している理由として、第一に事務仕事に対する「自分の意志なくただやっているという感じ」という<違和感>を語っており、この職種に対する積極的な意味づけは行われていない。また、彼女の考える「いい仕事」については「他の誰かではなく私ができること」と語っており、明確なイメージを持ってないようである。裏返せば、D嬢にとって就職は、自分を失う危機として体験されていると考えられ、どのような選択をすれば自分を失わずにすむのかが選択の基準になっているようである。

B氏とE氏は自分の将来に対する明確な展望は持っておらず、あくまでも自分の感覚を強調する点では共通しているが、2人にとってのユートピアは大きく異なっている。B氏は映画づく

りなどに、「自分の好きなこと」という積極的な動機を強調しており、あえて職業を限定しない
 ていると語っている。これに対して、E氏は職業選択に対する積極的な動機よりも、都会に対す
 る<違和感>を強調する。E氏は、都会や企業社会（特に金融）について「本質的に気を許せない」
 「胡散臭い」と語っており、「自分で汗を流して、直にもものを作って売る」「自然と触れ合
 う」「夕食を家族で食べられること」など、自分の実感を取り戻すことに重点が置いている。

6. インタビューのまとめ

自分でいられる／いられない

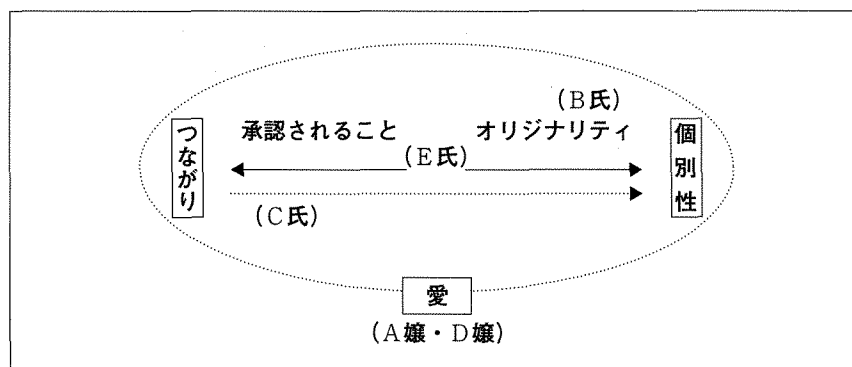
5人の語りにおける第一の特徴として、「自分でいられる」か「いられないか」という問題に
 ついての言及があげられる。これについて、E氏は端的に「どこまで自分が自分でいられる人
 生か」という問題について語っている。

彼らにとって、学校や企業は、「自分」を歯車のひとつの一人に還元してしまうような巨大な
 圧力を持つものとして体験されており、「自分でいられなくなる」ような恐怖を感じている。し
 かしその反面で、彼らは共通して、競争・管理社会のルールに対する<違和感>としてしか自分
 のありようを感じられないでいることについて語っている。彼らの「自分」についての感覚は、
 「自分である」という感覚を基準にするものとしては語られず、すでに「自分でいられない」と
 いう感覚に圧倒されている状況の中で、「自分」を取り戻そうとする試みの到達目標として語ら
 れている。そして、留年や休学についても、学歴のルールの上から脱出するための「賭け」として
 意味づけられている。

社会的・政治的なできごとについては、現実感を感じられず、自分たちの生活とは無縁である
 と感じている。この感覚は、「どうせ変わらない」という諦めをともなっており、先の受験・管
 理社会が自分たちの力ではとても抗えない巨大なシステムとして体験されていることでもある。

すべての価値観は疑わしいものとして体験されており、かといって自分の中に確信を持てる価
 値観を構成できず、また価値を構成できることすらもうたがわし区感じられているため、既存
 の価値に対する<違和感>としてしか自分の領域を確認できなくなっている。与えられた価値観
 を否定し、とりあえず<違和感>を手がかりに価値を模索していくしかないが、そのようななか
 で関心が身の回りのことに集中してきており、「手ごたえ」を求めて模索が続けられている。

図3. 「つながり」と「個別性」の関係



つながり／個別性

もう1つの特徴は、対人関係における「つながり」と「個別性」というテーマをめぐって、5人の語りを展開していることである。

B氏は対人関係を通じ合えない断絶したものであると語っており、他者とのつながりを欠いた個別性の相にリアリティを感じている。しかし、C氏にとっては対人関係は基本的につながりあえるものであり、他者とのつながりの感覚の後に「別々だ」という個別性の相が見出されている。E氏は「オリジナリティ」という個別性について強調しつつも、同時に「信頼」「認められる」という形で他者とのつながりも強く求めている。しかし、C氏と違い、E氏にとっては自分が他者と区別されているという感覚がまず前提にあり、その上で他者からの信頼が求められている。E氏は「つながり」の相と「個別性」の相に引き裂かれているといえるであろう。

このような引き裂かれ方はA嬢にも認められる。しかし、A嬢とD嬢の女性2人は、個人個人の違いという「個別性」と認めつつも、その違いを受け入れてつながりあう可能性として「愛」という概念を語っている。つまり、個別に分かたれたままつながりあうという形で問題を解消させる方向性を強調している。

自己回復への道

5人はそれぞれ「自分でいられる」ようなあり方について模索しているといえるが、その方向性は大きく2つに分けられる。

1つめは、自分の感覚に出口を求めるもので、A嬢とB氏があてはまる。B氏は一貫して感覚の大切さを強調しており、そこに判断基準を置いている。A嬢のほうは、さまざまな模索を経て、最終的に「好き」という理由で就職先を決め、そこに活路を見出している。

もう1つは、「自分にしかできないこと」という理想を追い求める方向性で、D嬢に顕著である。D嬢は、誰でもいいような仕事ではなく、自分にしかできない仕事を探しているがなかなかうまくいかないでいる。このような方向性はC氏やE氏においても語られており、理想が追い求められているのであるが内容ははっきりとしない。彼らにとって企業への就職は自分を失う危機として語られており、そうならないことのみに関心が集中しているようである。ただし、この中でE氏は、自分を失わない道として「直にものを作って、売る」という選択肢も見出しており、「自分でやっている」という実感を積み上げていくことに活路を開こうとしている。

第3章 結論

1. モラトリアム論における「問題の構図」

第1章では、1970年代後半に論じられた小此木、栗原、笠原のモラトリアム論を中心に、以下のように「モラトリアム問題の構図」を描き出した。

「青年期の延長」や「モラトリアムの延長」の背景には、管理社会における自己の希薄化と、情報化・消費社会における自己の肥大化という、2つのリアリティが見出された。そして、この2つのリアリティは「希薄化」と「肥大化」という反対のベクトルでありながら、共に同一個人の上で働き、「自己」に対する強い関心を引き起こすと考えられた。このような力動の場合、「自己」の同一性（アイデンティティ）に強く関心をもちながらも、その背後では引き裂くベクトルが働いているため、同一であることが非常に困難になることが予想された。このような視点から

見ると、「モラトリアム問題」「アイデンティティ拡散」といった言説は、相互に矛盾したリアリティを「自己」「アイデンティティ」という概念のもとに統合しようとする苦闘であったと考えられた。

1980年代以後の青年論においても、2つのリアリティに引き裂かれた構図は維持されていたと考えられ、傷つくことを恐れて対人関係で深入りしようとしないうちの脆弱性と、消費において自己を充足しようとする傾向、あるいは自己愛的に目立とうとする傾向などが問題として展開されていった。

2. インタビューから導き出された「問題の構図」

第2章では、在学期間を延長して大学にとどまる大学生を対象にインタビューを行い、彼らが自らについて語ろうとするときの「問題の構図」を描き出した。

彼らにとって「自分でいられる」か「いられない」という問題が最重要課題として語られた。学校や企業は、「自分」を歯車のひとつに還元してしまうような巨大な圧力を持つものとして体験されており、「自分でいられなくなる」ような恐怖を感じていた。しかしその反面で、彼らは共通して「自分」の存在について、管理されることへの〈違和感〉としてしか感じられないと語っていた。

もう1つの特徴は、対人関係における「つながり」と「個別性」というテーマをめぐって、5人の語りを展開していることである。「つながり」ながら「個別性」という2つの相の間で引き裂かれたり、個別性にひきこもったりと、2つの相を統合することは難しいようである。この困難について女性たちは、個人個人の違いという「個別性」と認めつつも、互いに異質なもののままでつながりあう可能性として「愛」という概念を語った。

3. 2つの「問題の構図」からの仮説

これら2つの「問題の構図」を対比してみると次のようになるであろう。

2つの「問題の構図」は共に、管理社会において「自己」が希薄化していくというリアリティを1つの軸としている。これは栗原(1981, 1989)や笠原(1977, 1988)によって指摘された問題であるが、このような管理の圧力との関係で問題になる「自己」は、具体的な内容をともなった感覚ではなく、漠然とした〈違和感〉としてしか感じられないものとして語られた。〈違和感を感じる〉ゆえに我あり、とでもいえそうな、世界に対して懐疑する運動としてしか「自己」は位置をしめていない。「自己」は、「歯車のひとつではない」「これは私のやりたいことと違う」というように、〈違和感〉あるいは否定形でしか感じられていないのである。

それにもかかわらず、インタビュー対象者たちは最大の関心を「自己」にはらっていた。歯車のひとつに還元できない「私」に対する承認を強く求めていた。管理社会への〈違和感〉としての「自己」から、「自己のあるべき姿」へ、この反転において「これは私のやるべきことではない、他にもっとふさわしいことがあるはずだ」という物語が成立する。これは、インタビューにおいては「個別性」の相として浮かび上がっており、他者から自分が区別された「オリジナリティ」「私だけ」という「自己のあるべき姿」へといたる欲求として語られた。

しかしながら、「自己のあるべき姿」などは観念にすぎない。「歯車のひとつでないならば、私は何者なのか？」このように立てられた問いへの回答でしかないのではないだろうか。

大平(1990)も述べているように、このような「自己のあるべき姿」へと向かうエネルギーは、1980

年代に商品イメージの消費という運動へと水路づけられていっと考えられる。「あれ」でなければ「これ」でもない、というように「自己のあるべき姿」へと到達すべく次々とイメージが消費されていったのである。インタビュー対象者においても、自分探しの過程でさまざまな自己イメージの模索が語られていた。

それにもかかわらず、自分探しの旅はなぜ終わらないのであろうか？

インタビュー対象者によって語られた「出口」を参考してみると、次のような方向性が考えられる。A嬢とB氏は「楽しい」「面白い」という感覚に出口を見出していた。また、E氏は「自分でやる」という手ごたえに出口を見出そうとしている。また、これは笠原（1977）の指摘する「手作り志向」とも合致する。これらは、すべて身体感覚に基礎を置いているといえるであろう。

観念としての「自己イメージ」が、身体感覚としての「自己感覚」を覆い隠してしまっていることが問題なのではないのであろうか？ 失われたのは「感覚」であるのに、探しもてられるのは「イメージ」というズレ。ここに堂々巡りへの落とし穴があるのではないだろうか。

しかし、このような堂々巡りの原因を個人のパーソナリティに還元するべきではないであろう。この堂々巡りが消費社会のエネルギーになっているという面も忘れてはなるまい。また、我々の側からも進んで自己愛的なイメージを消費している面も多分にある。ここには相互に助長しあう1つのシステムが成立していると考えられる。

ここで再び、1970年代後半に「青年期の延期」が問題視されたことを振り返ってみると、それがちょうど日本が本格的に消費社会化した時期に重なることに気がつく。ここから、本論文で示した2つの「問題の構図」は、管理社会化の上に消費社会が塗り重なることによって成立した構図であると考えられる。

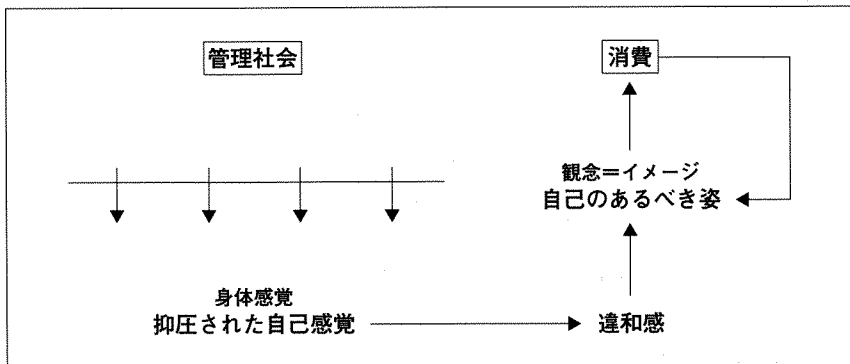


図4. 消費社会における「自己」をめぐるシステム（仮説）

おわりに

やさしさのゆくえ

本論文では現代青年の「モラトリアム」について考察した。しかしながら本論文を書くことは、ある意味で「傷つきやすさ」の背景を問うことでもあったように思う。

近年「癒し」という言葉を頻繁に耳にするようになった。また、「やさしい」という言葉も「地球にやさしい」などと付加価値としてもちいられている。これらの言葉には「傷を癒す」

「地球を傷つけない」というような、「傷つき」を無くすといった意味がこめられているように思われる。我々は年々「傷つき」に敏感になっているようである。

しかし、この「やさしさ」というものは何と両義的なものであろうか、他者とつながり合おうとするがゆえにお互いを傷つけ合うことになったり、お互いに傷つかないように配慮するがゆえに自閉的になったりしてしまう。私たちの「自己」は半熟卵のようにデリケートになっているのだろうか

栗原は青年のやさしさの起源を管理社会化に見た。そこで引き裂かれた若者たち弱者が、心情として響きあう。やがてそれはお互いに距離をとる「やさしさ」に変わったが、栗原(1989)は心の底で響きあう水脈が途絶えたわけではないという。

いつか栗原のいうように心と身体で響き合える日がくるのであろうか？

調査票

(家族構成と入学の動機)

- 1 今家族と同居していますか？
- 2 家族構成を教えてください
- 3 この大学へ来ることにしたのは、どんな理由からですか？
- 4 今の学部専攻を選んだのはなぜですか？ いつ頃決めましたか？

(留年や休学)

- 1 どうして留年(休学)することにしたのですか？
- 2 留年(休学)を決めたときはどんな気持ちでしたか？
- 3 留年をして、何か生活が変わったことがありますか？
- 4 この間に考えたことをお聞かせください。
- 5 自分が留年(休学)したことについてどう思いますか？
- 6 留年(休学)したことを後悔していますか？
- 7 両親は留年(休学)したことについてどのように思っておられるのですか？ また、そのことについてあなたはどのように思われますか？
- 8 ご兄弟はどのように思われているのですか？ そのことについてあなたはどのように思われますか？
- 9 留年(休学)したことで家族との関係で何か変わったことがありますか？ それはどのようなところですか？
- 10 留年(休学)して、自分の中で変わったと思うところはありますか？
- 11 もし留年(休学)しなかったら、いまはどのようにすごしていると思いますか？
- 12 他の人にも留年(休学)をすすめますか？

(社会)

- 1 今まで生きてきた中で、印象に残っている社会的・政治的事件がありましたら教えてください。それはなぜ印象に残っているのですか？
- 2 現在の政治についてどのように思いますか？ そのように思うのはなぜですか？
- 3 社会的・政治的な考え方について、誰から影響を受けましたか？ 受けたとしたら、どのような考え方ですか？
- 4 あなたは世の中がどのようであればいいと思っていますか？

- 5 友人などと、社会的・政治的なことについて話すことがありますか？
- 6 社会的、政治的な活動に参加していますか？ また、それはどんな活動ですか？ いつ頃からですか？
- 7 すこし大学生生活の期間がのびたことによって、社会的、政治的な考え方に変わったところがありますか？ それは、どのようなところですか？

(友人関係)

- 1 親しくしている友人はいますか？ どのような友人ですか？
- 2 サークルやクラブ、寮など、帰属している集団がありますか？ そこではどんな活動をしていますか？ その集団に参加することから、あなたにどのような影響を受けましたか？
- 3 友人たちと一緒にいるときには何をしていますか？ また、どんなことについて話し合いますか？
- 4 友人との関係で悩んだことはありますか？ それはいつ頃、どのようなことですか？
- 5 人との関係で、何を一番大切にしますか？ そのように考えるきっかけなどがありましたら、教えてください。
- 6 留年（休学）したことで、人との関係で何か変わったことなどありますか？ それはどのようなことですか？
- 7 異性との関係では、どのようなことを大切にしますか？ これだけは心がけたいというようなことがあればお話しください。
- 8 異性関係について悩んだことはありますか？

(価値観)

- 1 あなたは生きていくうえで、どのようなことが大切だと考えますか？ それはなぜですか？ いつ頃から、どうしてそう思うようになったのですか？
- 2 尊敬する人や、あなたが影響を受けた人（もの）は誰ですか？ どのような影響を受けましたか？
- 3 価値観や人生観について話し合うことがありますか？ どういう人と話し合いますか？
- 4 ご両親はどのような価値観をもっておられますか？ それについてあなたはどのように思いますか？

(職業)

- 1 将来の職業についてどのように考えていますか？
(決まっている場合) どんな職業ですか？
(はっきりしない場合) 漠然とでもどういう種類のことをしたいと思っていますか？
(特定の職業につく気がない場合) 職業につくことについてどのように考えていますか？
- 2 その職業（あるいは就かないこと）に決めた理由はなぜですか？
- 3 その職業の魅力はどのようなところですか？
- 4 何かもっと良い職業があれば変えるのをいといませんか？ その時、もっと「よい」という基準は何ですか？
- 5 ご両親は、あなたにどのような職業についてほしいと期待していますか？ それに対してあなたはどのように感じていますか？

引用文献

- 遠藤辰夫 1972 留年学生をめぐって 厚生補導, 72, 2-9
- 遠藤郁夫 1978 留年(事例) 厚生補導, 148, 51-55
- Erikson, E.H. 1959 Identity and Life Cycle. (Selected paper. Psychological, No. 1), International University Press. 小此木啓吾訳 1973『自我同一性』 誠心書房
- 藤土敬三 1978 留年-その特徴と指導について 厚生補導, 148, 25-32
- 伊藤研一 1982 「親密さ対孤独」の危機解決様式に関する実証的研究 東京大学教育学部教育相談室紀要, 5, 123-128
- 笠原嘉 1973 現代の神経症-とくに神経症性アパシー(仮称)について 臨床精神医学2, 153-319
- 笠原嘉 1977 『青年期-精神病理学から-』 中公新書
- 笠原嘉 1988 『退却神経症-無気力・無快楽・無関心の克服』 講談社現代新書
- 城戸秀之 1993 消費記号論とは何だったのか 『若者論を読む』 小谷敏(編) 世界思想社
- 栗原彬 1981 『やさしさのゆくえ=現代青年論』 筑摩書房
- 栗原彬 1989 『やさしさの存在証明 若者と制度のインターフェイス』 新曜社
- Marcia, J.E. 1966 Development and validation of ego identity status. Journal of Personality and Social Psychology, 3 (5), 551-558
- 宮川知影 1978 大学の大量化と留年現象 厚生補導, 148, 2-13
- 無藤清子 1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究, 27, 178-187
- 無藤清子 1994 青年期とアイデンティティ 心の科学, 53, 47-51
- 村瀬孝雄 1981 退行しながらの自己確立-或るサークルのこと- 『キャンパスの症候群』 笠原嘉・山田和夫(編) 弘文堂
- 中村敬 1995 回避・引きこもりを特徴とする対人研究, メンタルヘルス岡本記念財団平成7年度助成報告集8, 91-94
- 大平健 1990 『豊かさの精神病理』 岩波新書
- 大平健 1995 『やさしさの精神病理』 岩波新書
- 小此木啓吾 1978 『モラトリアム人間の時代』 中央公論社
- 小此木啓吾 1981 『自己愛人間-現代ナルシズム論』 朝日出版社
- 小此木啓吾 2000 ひきこもりの社会心理的背景 『青年期のひきこもり 心理社会的背景・病理・治療援助』 狩野力八郎・近藤直司(編) 岩崎学術出版社
- Orlofsky, J.L., Marcia, J.E. & Lesser, J.M. 1973 Ego identity status and intimacy versus isolation crisis of young adulthood. Journal of Personality and Social Psychology, 27 (2), 211-219
- 斎藤環 1998 『社会的引きこもり 終わらない思春期』 PHP 研究所
- 千石保 1985 『現代若者論-ポスト・モラトリアムへの模索-』 弘文堂
- 下山晴彦 1992 モラトリアムの下位分類の研究 教育心理学研究, 40, 121-129
- 下山晴彦 1995 男子学生の無気力の研究 教育心理学研究, 43, 145-155
- 阻中達 1981 留年 『キャンパスの症候群』 笠原嘉・山田和夫(編) 弘文堂
- 植村宗弘 1993 マーケティング時代の「若者論」と若者たち 『若者論を読む』 小谷敏(編) 世界思想社
- 山田和夫 1989 境界例の周辺-サブクリニカルな問題性格群- 季刊精神療法15 (4), 350-360